

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

令和 7 年 10 月 22 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科	地球環境学堂
職 名・学 年	准教授
氏 名	落合 知帆

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	ヘリテイジ2025 土と伝統建築の遺産に関する国際会議		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☒ 口 頭 ・ ☐ ポスター ・ ☐ その他()		
発 表 題 目	Vernacular Architecture in Disappearing: Unveiling Japan’s Mason Work Huts in Shiga Prefecture (消えゆくヴァナキュラー建築:滋賀県における日本の石工小屋の実像)		
開 催 場 所	スペイン、バレンシア		
渡 航 期 間	令和 7 年 9 月 7 日 ～ 令和 7 年 9 月 15 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	193,780
		宿泊費(一部)	109,094
		滞在費(日当)	
		学会参加費	47,126
		その他(国内交通費)	
合計		350,000	
	以上に助成金を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)この度は、国際研究集会発表に採用いただき、ありがとうございました。無事に研究発表を終え、また、多くの研究者との情報・意見交換を行うことができ、有意義な機会となりました。		

1. ヘリテイジ 2025 土と伝統建築の遺産に関する国際会議

本会議は、UNESCO-ICOMOS の国際科学委員会のうち、Vernacular Architecture（伝統建築）委員会および Earthen Architecture Heritage（土造建築遺産）委員会において中心的役割を担うバレンシア大学の研究者らが主催している国際会議である。これらの委員会は、ICOMOS 内では国際的な認識が低い分野であるため、本会議は伝統建築・土造建築に関する情報共有とその国際的認知・位置づけの確立を目的とする取り組みの一環として開催された。

会議のテーマは、Conservation, Adaptive reuse and Urban Regeneration とされ、伝統建築の保全、活用および都市部における再評価と活用をめぐる議論が行われた。ヨーロッパ諸国をはじめ、アフリカ、中東、アジアなど多地域から研究者が参加し、多様な伝統建築に関する基調講演、研究発表、ポスター発表が3日間にわたり実施された。さらに、モロッコの伝統的床工法を学ぶワークショップや、バレンシア大学の研究者が長年にわたり取り組んできた石堤と土壁による建築群（集落）の保全・活用に関するフィールドワークも併せて行われた。

2. 研究報告の概要

本国際会議にて筆者は、「Vernacular Architecture in Disappearing: Unveiling Japan's Mason Work Huts in Shiga Prefecture（消えゆくヴァナキュラー建築：滋賀県における日本の石工小屋の実像）」と題する研究を発表した。本研究は、かつて石材産業が隆盛を誇った滋賀県大津市比良山麓地域を対象とし、石工らが花崗岩の加工作業を行っていた伝統的な作業小屋（石工小屋）に関する調査研究の成果を報告した。調査対象地である大津市北比良地区では、大型の石材が産出したことから、蔵や住宅の基礎、または鳥居の建造などに用いられる「長物」と呼ばれる石材製品の製造が盛んに行われていた。これらの製品は琵琶湖を介して湖東地域などへ搬出・販売されていた。湖岸に建てられていた作業小屋は現存していないが、90代の元石工親方への聞き取り調査を通じて、その建築工法、使用資材、構造的特徴等を明らかにし、平面図・立面図およびスケッチにより作業小屋の再現を試みた。さらに、隣接する大津市南小松地区では、主に石燈籠の製作が行われていたことが知られている。ここでは、作業小屋が「石出し道」と呼ばれる石材運搬用路沿いに民家に隣接して建てられており、用途を変えつつも現存する石小屋が確認できる。これらについては、実測調査に基づく図面および写真資料を作成し、その建築的特徴を明らかにした、このような石工小屋は、明治期以前から昭和中期にかけて盛んであった当地の石材業の実態を示すとともに、地域の生活環境および景観を構成する重要な要素である。しかし、これまで研究対象として十分に取り上げられてこなかった分野であり、これらを記録・分析することは、地域産業と生活文化との関係を明らかにする上で有意義であり、地域史的資料としても貴重である。

質疑応答では、こうした建築物を記録・保全する際に、物理的な構造物のみならず石工職人が有していた知恵・知識・健康に対する配慮にも注目すべきであることを指摘した。また、1970年代以前の建築物や地域の生業活動の多くが十分な記録がなされるまま失われつつある現状に対して、参加者間で危機意識を共有し、早急な対応の必要性を再確認する機会となった。